

## (シラバスNo.13)

科目名	教育評価特論	科目コード	17P-A7	
			21P-A5	
	科目群名	専門科目 (共通領域)		
	Advanced Seminar on Evaluation in Education	必修/選択	選択	
担当教員	黒石 憲洋	教職	小・中・高	
		単位数	2	

## 【授業概要】

効果的な教育活動の根幹を支える重要な要素のひとつである評価について学習する。教育測定および評価の歴史、テスト理論を含む教育評価に関する理論、いくつかの能力観あるいは学習観に基づく教育評価の方法論について講義をおこなう。その上で、具体的な教育文脈における学習者評価および教育活動評価の現状について調査し、それらを比較検討する中で学習者評価および教育活動評価の適切な在り方についてグループ討議をおこなう。さらに、現実的な制約を踏まえて文脈に応じた学習者評価および教育活動評価の改善策を提案する。これらのプロセスを通じて、教育評価の意義について再確認する。

## 【授業の到達目標】

教育評価の歴史や理論、方法論、意義について理解した上で、具体的な文脈における教育評価の適切な在り方について根拠をもって考察し、具体的な文脈における現実的な制約を踏まえた教育評価の改善策を提案できるようになることを到達目標とする。課題のトピックとして、(1)学習者評価、(2)教育活動（あるいは教育機関）の評価、の2つを取り上げる。

## 【授業の形態】

メディア授業の実施【あり】

<授業の特徴>（毎回実施に◎、適宜実施に○を付けてください）

形態	実施	具体的に実施すること
講義	○	以下のトピックについて講義をおこなう。 ・個人差の測定と評価の歴史 ・測定と評価の心理的影響 ・能力観および学習観に基づく教育評価の方法論 ・評価の客観性と公平性
グループワーク・質疑	○	以下のトピックについてグループ討論をおこなう。 ・様々な文脈における学習者評価の現状の比較検討 ・文脈を通じた学習者評価の適切な在り方 ・様々な文脈の教育活動評価の現状の比較検討 ・文脈を通じた教育活動評価の適切な在り方 ・学習者評価と教育活動評価の対比 ・教育評価の意義
演習	○	以下のトピックについて現実的な制約を踏まえた改善策の提案をおこなう。 ・具体的な文脈に即した学習者評価 ・具体的な文脈に即した教育活動評価
プレゼンテーション	○	以下のトピックに関して調査および考察した内容の発表をおこなう。 ・様々な文脈における学習者評価の現状 ・文脈に即した学習者評価の改善策 ・様々な文脈における教育活動評価の現状 ・文脈に即した教育活動評価の改善策

制作		
その他 ( )		

### 【授業計画】

回	内 容
1	ガイダンスとイントロダクション
2	個人差の測定と評価の歴史、測定と評価の心理的影響
3	能力観と学習観：ポートフォリオ評価
4	評価の客観性と公平性：ルーブリック
5	具体的な文脈における学習者評価の現状（発表）
6	様々な文脈における学習者評価の比較検討（討論）
7	文脈に即した学習者評価の改善策の提案（発表）
8	文脈を通じた学習者評価の適切な在り方（討論）
9	教育活動の評価：改善サイクル
10	インストラクショナル・デザイン
11	具体的な文脈における教育活動評価の現状（発表）
12	様々な文脈における教育活動評価の比較検討（討論）
13	文脈に即した教育活動評価の改善策の提案（発表）
14	文脈を通じた教育活動評価の適切な在り方（討論）
15	まとめ：学習者評価と教育活動評価の対比、教育評価の意義再考

### 試験

#### 【履修上にあたっての準備】

自分自身が（評価者あるいは被評価者として）体験した経験を振り返り、教育場面（学校・学校外教育を含む）・職業場面・生活場面・その他の場面において、広くどのような評価活動が存在しているか（あるいは存在していたか）について考えておく。

授業はグループ討議等を含むため、グループに貢献する意識および態度をもって授業に臨むこと。

#### 【授業外学修（予習・復習）】

授業内には4回の発表機会があり、都度グループ討議する機会が設けられている。これらは考察を深めるために他の視点から意見を求めるための重要な機会として位置づけられる。取り扱う文脈を異なる分野の者にも分かるように説明し、課題を明確化することで、課題解決にとって有効な意見を引き出せるよう、準備をおこなう必要がある。プレゼンテーション資料については、事前に他の受講者に共有する。また、他者の発表に対しては、授業時間内の質疑応答以外に、発表後にWeb上で相互レビューをおこなう。これらの機会を通じて、他の文脈を理解し自らの文脈の相対化を図るとともに、他者の課題解決の策定に貢献することが期待される。

なお、授業中に生じた疑問や不明な点については、自己学習・受講者間での学習・教員への質問等によって、次回の授業時間までに必ず解消しておくこと。

#### 【評価方法】

この授業では、ゼミナール形式を取り入れて2本のレポート作成をおこなう。レポートのテーマは、教育評価についての理論を踏まえた具体的な文脈における(1)学習者評価および(2)教育活動評価の改善策を提案するものである。これらのレポートを科目修得試験とする（各25%、合計50%）。評価基準は以下の通り。

- A：教育評価の理論を踏まえて、妥当かつ有効な文脈に即した改善策が提案されている。
- B：教育評価の理論を踏まえて、妥当かつ有効な一般的な改善策が提案されている。
- C：改善策が提案されているが、その有効性は文脈に依存している。
- D：改善策が提案されており、その有効性は推察されるが、明確な根拠が示されていない。
- E：改善策が提案されていない。あるいは、提案された改善策が有効でないと判断される。

また、自他の考察を深める機会としての発表・討論・相互レビューにおける貢献度を評価する。具体的には、発表者としての発表内容・レジュメ・プレゼンテーション、討論における質疑応答や議論への貢献、相互レビューにおける意見やアドバイス等のコメントの適切性や有益性についてを総合的

に評価する。

【教科書】

特に指定はしない。必要に応じて参考図書を参照すること。なお、必要な資料については授業時に適宜指示する。

【参考図書】

- 池田央 (2007). テストの科学：試験にかかわるすべての人に〔復刻版〕 教育測定研究所  
田中耕治(編著) (2002). 新しい教育評価の理論と方法 [I] 理論編 日本標準  
東洋 (2001). 子どもの能力と教育評価〔第2版〕 東京大学出版会  
梶田叡一 (2010). 教育評価〔第2版補訂2版〕 有斐閣  
北尾倫彦(編) (1996). 新しい評価観と学習評価 図書文化  
高浦勝義 (2004). 絶対評価とルーブリックの理論と実践 黎明書房  
西村文男・天笠茂・堀井啓幸(編) (2004). 新・学校評価の論理と実践—外部評価の活用と内部評価の充実— 教育出版  
ロッシ・リップセイ・フリーマン (2005). プログラム評価の理論と方法—システムティックな対人サービス・政策評価の実践ガイド 日本評論社